



素の自分

永田円了

Your Plain Self

自分が自分自身について、どれほど知っているのだろうか。「ナポレオンという人について知っているのは、ナポレオン自身であるというのは、大きな人間の錯覚である」という諺がある。一番ちかい自分自身を最も知らないというのは、その通りであると思う。では、自分を知る方法は何かあるのだろうか。

分人という発想

自分自身を知ることができるとするなら、それは他者との関係に於いてであろう。職場での自分、友人に対する自分、家庭での自分、また恋人と一緒にいるときの自分。どれも真正銘の自分である。でもみんな違う。職場での凛とした自分と、気を許した相手に対する自分は、当然違う。顔つきさえも変わっている。これを、作家、平野啓一郎氏は“分人”と言った。私たちは、このように日常生活において分人を演じているのである。

ユングのペルソナ

心理学者ユングのコトバを借りるなら、分人は‘ペルソナ’（ラテン語で役者の仮面）と同義語である。人々は毎日の生活において、一種の仮面を付けているという。ペルソナとは、社会が人間に要求する結果として生まれた産物と言える。一方で人がこうなりたい、こう見られたいと願う姿でもあろう。しかし、ペルソナは本物の人格ではない。本物の自分、“素の自分”は、いつも仮面の後ろ側にいるということを忘れてはならない。「ペルソナを演じるとき、当の本人が外見上の自分と、素の自分とは同じではないという認識を持っている限りは、大丈夫」とユングは言う。



素の自分

素の自分の存在をコトバで明らかにすることは容易ではない。あえて言うなら、無色透明な自分、色眼鏡でもものを見ない自分、善悪、好き嫌いを超越した存在、温かいエネルギーが充満した存在と言えよう。現実の世界で、たとえどのようなごたごたがあろうとも、いろいろな分人が暴れようとも、温かなエネルギーで満ちた‘素の自分’から発生したものであるなら、「それは、それとして」大丈夫だ、と鈴木大拙も言った。



分人は分人としての役割を演じているのであるが、分人イコール素の自分ではないことに気づく必要がある。仮面はあくまで仮面、そのウラに本当の自分がいることを認識することである。分人たちが、どれだけ失態をしようとも、素の自分の存在はびくともしないということである。

<事例 DVD>

分人の発想／ 平野啓一郎 視点・論点より
 ユング ペルソナ
 玉三郎／ 女形（ペルソナ）を演じきる
 石原裕次郎／ 役柄と自分とのギャップに悩む
 嵐寛寿郎／ あっけらかんと悩まない
 上原浩治 レッドソックス／ハイタッチする、分人になり切る
 イチローインタビュー／分人になりきれない
 猪瀬前東京都知事／‘第二のみち’から出た分人
 鈴木大拙／現実のごたごた／それは、それとして、…
 米映画「私の中のあなた」／家庭のごたごた、にも拘わらず温かい
 歌・中島みゆき「ヘッドライト・テールライト」

